

卒業式学長式辞 2007年度 (2008.3.19.)

樋口和彦学長

学部の学生諸君ご卒業おめでとう。大学院の諸君には修士修了おめでとうございます。会場2階の隅の方にお座りの自信のない学生諸君を含めて、過日の大学教授会ならびに大学院研究科委員会において、皆さんは目出度く卒業論文など所定の単位を修得し、今日晴れて卒業証書・学位記授与式に望まれたのであります。

また、今日までご子弟を物心両面で身を削る思いでお育てになったご列席のご父母の皆様のお喜びもまた一塩であると推察申しあげます。その上、このご多忙の中、わざわざこの栄えある式に遥々ご参列頂いた、知恩院法主坪井俊映猥下ご名代をはじめ、学校法人京都文教学園理事長様、関係学校校長様、校友会、同窓会役員の方々、多数のご来賓の臨席をえましてこの卒業式に華を添えて頂いたこと有り難く感謝致します。今ここに、卒業生諸君をこの学び舎から、その前途洋々ではありますが、波乱に満ちた21世紀の世界に送り出したいと思えます。

この学長たる私にとりまして今回の卒業式をもちまして、卒業生諸君と共に、いわゆる学園を卒業し、壇上の後続く若い優れた先生方に学園の将来を託して、この学び舎を後にすることになりました。したがって、これが私の学長としての最後の式辞で、諸君への心からなる饒の言葉としたいと思います。

さて、私がこの学校法人京都文教学園に大学長としてまいりましたのは、平成9年の春でしたから、以来11年、学術顧問および臨床心理センター開所から数えて12年、全くの新大学の創設に参加して、今日まで教職員の皆様と苦楽をともにして参りました。これはひとえに皆様の助力なしには、私には何も出来なかったと感謝しております。それは毎年毎年、何かを創設する嵐の様なキャンパスでの日々でありました。

顧みますと、学部課程が完成するや直ちに、わが国初の臨床心理学研究科、ならびに文化人類学研究科修士課程の大学院を立ち上げ、2年後完成するとすぐさま博士課程を発足させました。3年後、臨床心理学博士の第一号を出

すと共に、2 学科に加え、現代社会学科を創設し、それが今ここに結実し、皆さんの前に第一回の卒業生が参列しております。しかも、学科の就職率 100 パーセントに近いものになりました。そして、この 4 月、新学期からいよいよ人間学部と並んで、わが国初の臨床心理学部を擁する総合大学に変貌することとなりました。

その間、小生には様々な思い出がありますが、何よりも大きかったのは、最初の入試の志願者の記録的な多さでした。若い人がこれから自分の人生を託す大学として、未だ野のものとも、山のものとも分からない大学に押し掛けたのは、きっと計画した私どもも知らない可能性を受験生たる若い諸君が見たからに違いないと思いました。この初期の熱気が今日までの大学の気風をを支え、これからの輝かしい未来を開拓するものと思っています。この内実を形成してくれた学生諸君の先見性とその情熱に私は何より感謝したいと思えます。

ここで、私の自分の教師人生を顧みながら、これから出立つ諸君に何が言えるか、を考え 3 点に分けて贈りたいと思えます。

その第1は今、私の胸にあるものです。諸君と同様、横浜第4岸壁から米国船プレジデント・ウイルソン号に乗船し、遙か敗戦の故国を後にして、米国ボストンを目指して旅立ったその日の光景を心に浮かべます。やがて房総半島の山々が夕日に沈み、一人甲板で大きな志をい抱いて立つシーンであります。国を興すために「学ならずんば帰らずと」遙か昔、中国の唐に渡った遣唐使を思いながら、甲板にしばしたたずんでおりました。やがてボストン留学を終え、チューリッヒに渡り、研鑽を経て、今ここにおります。

諸君も同様、今ここに輝かしい船出をしようとしていられます。ここで何より必要なのは、人生に対するまず志であり、貴方の使命であります。万葉集に歌われているように「いづくにか舟はてすらんあれの崎、漕ぎたみゆきし棚なし小舟」。端から見ると危うく見えるが、ただ漫然を船を漕ぎだすのではなく、かけがえのない唯一回の己の人生に向けて、若者らしく目指すものをはっきりと見据えながら歩んで欲しいと思います。

そのため、まず簡単なことを実行してみてください。それは、何かそのために精進するものはないかを考えてください。まず、自分に戒律を課すことです。タバコを吸わない、決してパチンコをしない、何でも結構です。イスラム教の人々は豚を食べません。おそらく、彼らは食べようと思えば食べられる筈です。しかし食べません。「しようと思えば出来るのに、あえて自分はしない」というのが無限の欲望に対する人間の掟です。出来ることは何でもするというのは、無限の欲望の奴隷であり、それは人間でなくて、動物です。何か1つでも制限して、貴方の欲望が無限でないことを証明して下さい。肉食も妻帯しないと誓え、とは言いませんが、せめて何か一つを決めて志の高さを示して下さい。そして、人生 Never Give Up 石に齧りついても初志を貫徹してください。志は放棄しない限り、必ず凡人でも貫徹できると、私は考えています。

第2は、その人のもって生まれた資質というか、能力に関してです。おそらく諸君は悪名高い日本の学力主義の入学試験の弊害に苦しんで、一度や二度挫折し、自分が如何に能力において欠けているか、思い知らされたことでし

よう。ですが、私は人間の能力にはその人自身の本来備えられた能力だけではなくて、じつは自分にはないが、だから他人に助けてもらえる、というもう一つの能力も大切だと思っています。私自身、学長としてもどれだけ人に助けられたことか。

人間はジョン・ロックが言うように白紙（タブラ・ラーサ *tabula rasa*）で生まれてくるのではなくて、本来如何なる環境にも生きてゆける天才の能力をもっている。赤ちゃんは既に生まれながらにもっている、説が今心理学で台頭してきていて、これをライブニッツの伝統と呼んでいます。環境から学習して発達するのではなく、むしろ人間の活動は目的的で、文化に接触するにつれて、目的に即して形成され発達するという説です。これは人に助けってもらえるのも能力の一つです。もっともゴールドン・オルポートという心理学者は遺伝と環境の両学説の間を心理学はいつも行き来していると言いますが、電車の中で出会う赤ちゃんのまなざしの俊敏さに私は驚かされます。お母さんが私を気づく前に赤ちゃんは私をいち早く気づいています。残念ながら人間は育つにつれてその俊敏さを失うのであり

ます。この赤児のような心、周囲の他の人から助けてもらえることも無類の強さで、これは無限の力です。

そのためには、自分の不完全さを知り、他に対して自分を絶えずオープンして助けを受けること。これが勇気というものです。私は、自分の人生を振り返ると、私が何かをなし遂げるより、如何に困ったその時に、思いがけない人に情けを頂き、助けてもらったという体験を多くもっています。そして、今この年になってその出会いの不思議さをつくづくと感じます。

次の第3はこの現代の社会の性格についてです。あなたは志をもち、自分の資質能力だけでなく、あなたは赤児のように人の力を有り難く受ける存在になれ、と私は述べました。次はそのあなたが出て行く社会の問題であります。

それはじつに危険に満ちた世界です。この21世紀の今は、14、5世紀から始まった西歐の近代社会も20世紀に至って、近代兵器により戦争と殺戮の時代という末期に差し掛かっています。これは自然科学の中でも近代科学技術の異常な進歩によって齎されたものです。しかも、否応無しに、われわれ東洋人も英語とコンピューターの時代

に全身が巻き込まれています。その異様な速さと力の圧力に特徴があります。うっかりすると、一人の例外もなく、巻き込まれ、魂を失った「生きている屍」への道へと人間はつき進むことになります。

昔、ある学生が「私は就職して社会の歯車になるのは嫌だ」と言ったら、「そのような考えでは、君は歯車にもなれない。歯車はきちっと休みなく回らなければならないから」という厳しい答えが返ってきました。まさに、貴方がたが出立つ社会は、私が巣立った戦後の荒廃の時代より、もっと人間の魂にとっては、何もかも整備しつくされているが故にもっと息苦しい時代かもしれませぬ。

しかし、諸君、このたとえ毎日があたかもピストルの引き金に指をおさえた緊張した日々と感ずるとしても、どうか恐怖で引き金が金を引かないでください。たとえ残された決断の時間は少なくとも、ぐっと引き金を反対に押しやって、恐怖の代わりに銃口を向けた人間を信じて、コミュニケーション出来る人間になって欲しいと思います。原子爆弾は置かれたままなら、ただの鉄の塊です。その引き金を引くのは、人間の悪心や弱さや恐怖からです。そして、地球

の環境は個人や国家のエゴを遥かに超えて悪化していきま  
す。

どうか諸君、我々東洋人のエゴは欧米近代のエゴとは  
違う筈です。それは心ある人に触発されて、語り始め、や  
がてその本体を現しては、舞い、語り終わると満足して消  
えてゆくお能のシテのようであります。貴方が舞う21世  
紀という舞台上で思う存分に生き抜いて下さい。その気品の  
ある貴方の美しい姿を期待しながら、私もまた去った後も  
美しい老人の日々を送ります。もし運良く時がったら、皆  
さんにお会いしたいものです。皆様のこれからのご活躍を  
祈っています。

最後に、山折哲雄先生から教えられた一句をおくりま  
す。それは1924年3月知恩院の塔頭常称院の寺男をし  
た異色の俳人尾崎放哉（ほうや）の一句であります。「咳  
をしても一人」。そこには西欧近代のデカルトのエゴより  
も、さらに高貴で鮮烈な「ひとり」が日本語のなかで生き  
ています。外の素晴らしい世界と対峙しながら、病に傷つ  
きながら生きる一人の東洋人の強靱な「自己」ここにあり  
ます。

私の好きな神学者の一人にポール・テーリッヒの言葉に、「The Courage to be」というのがあります。「存在への勇気」と訳せますが、この時代は、自分が自分として存在するためには、それ相応の勇気をもたねば生きられぬ時代であります。どうか諸君、如何なる前途に困難が待ち構えても、存在することへの勇気をもって、終わりまで生きて、何時の日にか貴方が自分に掲げた掛け替えのない使命を達成してください。

それでは、諸君のご多幸を祈ってこの学長としての最後の辞を終わります。ご清聴を感謝します。

(おわり)